

稠密さと揺らぎ、そのコア

ここ最近の中嶋の作品の特徴を述べるならば「稠密さと揺らぎ」という言葉を挙げたくなる。「稠密」とは(あの作品のどこが?と思うかも知れないが)ぎゅっと中味が詰まっていて密度が高いことである。「揺らぎ」の方は作品のどこを見て良いのか分からないあの感じのことである。

立体作品には中嶋を今の絵画作品に導いた役割もあるが、ここでは主に絵画作品について述べたい。

一見したところ取りつく島のないように見える作品からは、はじめは何を見てよいのか分からない。何を描いたのか、あるいは何をしようとしたのか分からない。だけれど何かが少し変だ。最初は少なく思える手掛かりだが、よく見ていると見慣れた絵画とは違うことを感じる。何らかの仕掛けやヒントによってその違いに気がつくよりも先に何か作品の佇まいのようなものによってそう感じる。

中嶋の作品、画布にコラーージュの作品群は物質感が強い。量感があるわけでも、目立つ素材が使われているわけでもないのにそう感じる。作品は画布に彩色した紙が貼られている。塗られている色は少し滲んだ色名が分からない茶系や青緑の暗濁色。今にも剥がれそうな紙の小片、キャンバスの木枠にわずかな歪みと画面の縁にあるへこんだ跡。今回は変な包み残しがある画布の張り方をしている作品もある。それに加えて普段キャンバスに絵を描く人でなければ気付かないことだが、よくある規格サイズの寸法ではないことが分かる。

聞けば使う絵の具は複数の顔料にレジン(樹脂)を混ぜて作り(顔料の素となる石を砕くところから始めることもあるらしい)、大きな紙に刷毛で、自作の絵の具を塗って色紙をつくる。その色紙を手でちぎる。最初に1m四方の色紙をつくったにもかかわらず、(この時はハサミで)切り取っていったら豆つぶくらいになったという冗談みたいな話もあるが、これは感性に従って何度でも作り直すという作者の制作態度が表れた逸話だろう。ちぎった色紙は画面に貼ったり剥がしたりしているうちに、ほとんど糊の跡だけが残ることもある。画布が張られた木枠は古い手作りの木枠を更に作り直したものが多い。

中嶋の作品から受ける物質感は作品が規格化されていないところから来ていると思う。言い換えれば作り直されながら使われた手作りの古道具のような物質感だ。中嶋のキャンバスと色紙は通常の支持体と描画材としての役目はそのままに物質感という別の存在感がある。キャンバスの歪みや傷跡の形。剥がした糊の跡。端の浮いた紙。均一にはならない顔料の粒子、あるいは刷毛むらがつくる滲み。などの二つと同じにはならない表情が残されている。こうして見ると作品の持つ物質感は、ただ物体であることではなく、絵画の形式を通すことによって見えてくる物質感であることが分かる。

そしてまた作品からは別のことも見て取ることが出来るし、疑問も浮かんで来る。画面にはコラーージュでつくられた色と形と同じくらいにコラーージュの痕跡が見える。なぜコラーージュの紙はあれほど小さな形に行き着くのか。コラーージュは何かを描いているのか。貼られた色紙と糊は、物質であることだけでなく、何かを描画したようにも、ただの行為の痕跡であるようにも見える。

中嶋が作品を成立させようとするとき、絵画のつくりの自明のところから始めない。それよりも前の段階から始まっている。絵画になる前の絵の具や木枠が「絵画」になっていくこと。塗られた絵の具やちぎった紙が「色と形」になっていくこと。制作の行為自体が「作品」の中に見えること。こうしたことが中嶋の作品では、多くの絵画制作において自明であるところの、色と形が「像や空間」になっていく、ということと分節されずに一体となって表される。支持体や描画材は、支持体や描画材でありながら、どこかまるでそれ自体オブジェのような物体であり、画面上の色と形は、色と形でありながら痕跡として示された創作行為である。作品はそれらのどれとでも言える状態である。一つの要素に別の見え方が同時に詰められている。

作品を見ていると、こうしたことを感じたり考えたりして、注目する点が決定的にどこかに留まらずに移っていく。もちろんのこと移り揺らぎ続けているのは、見ているこちら側の認識だ。

中嶋の立体作品では、傷、汚れ、経年変化といった時間を経て素材に記された履歴自体が作品の大きな要素となっている。一方で絵画作品では立体作品の持つ、時とともに記された情報の代わりに、多くの制作工程を経ることで作品に多くの情報が与えられている。その制作工程の多くは描画とは違う方法だ。それは偶然出来たささいな傷のように残っている。

最初に言いたかった稠密さとは見るべきものがあり続けることである。一つの作品に現れ、移りゆく見え方の違いがつくる、見ることの終わりのなさのことだ。あえて言えばこの見ることの複雑さが美しさをつくっている。

中嶋のこれらの作品から感じたものを説明することは難しい。しかしながらその理由は、何が描いてあるのか特定出来ないから、ということではない。

絵画とは結局のところ何なのかということを理解しようとしたときに行き当たる事柄がある。それは世界というものを理解しようとしても、その過程で多くの気づきがあるにせよ最終的に分かり難いことに似ている。

中嶋のこれらの作品から感じたものを説明することの難しさは、この分かり難いものに迫るということに由来する。中嶋が良い作品に感じる言う「美しい 存在する 何か」という言葉の連なりはそういった類のものを表していると思っている。

私たちが中嶋のこれらの作品から感じているのは、そうしたものではないだろうか。

鈴木健二（友人、画家）
2020.6.27